



ちょっとこぼれ話 XLIII

濱口 恵子

久々のブレイク・タイムです。

このシリーズも、早 40 回を超え、今回で 43 回目を迎えます。タイトルの横には、ローマ数字で回数を書いています。少しでもローマ数字に馴染んでもらおう、というのがねらいです。

ローマ数字の表し方は、独特で、規則性はあるのですが、慣れていないとまごつきます。使用場所としては、Henri IV (アンリ 4 世) のように順序や、論文・本の章立てにおける番号として使われたりします。アラビア数字の上位概念として、使用されることが多いようです。

ところで、ローマ数字では、3,999 までしか表現できません。4,000 以上の数字は、基本的にないのです。基本的にと言ったのは、記号をつけるなどの工夫をしての表現方法はあるのですが、通常では使われないからです。古代ローマ時代には、使う必要もなかったのでしょうか。3,999 をローマ数字で表現すると、次のようになります。“MMMCMXCIX” 長いですね。自分で書くのは少しむずかしくても、エクセルの関数を使えば大丈夫です。3,999 までのアラビア数字をローマ数字に変える時は、ROMAN 関数を、逆に、ローマ数字をアラビア数字に変える時は、ARABIC 関数を使うと簡単に出てきます。一度、試してみてください。

いきなりローマ数字の話で、驚かれたかもしれませんが、今回は、「西洋社会におけるギリシア・ローマ」をテーマに取り上げてみたいと思います。その取り掛かりとして、ローマ数字に触れてみました。

西洋文化の 3 大源流は、ヘレニズム、ヘブライズム、クリスチャニズムです。

西洋社会が、キリスト教文化の上に成り立っているのは、論を俟ちません。年代の数え方を見てもそうです。キリストの生誕した年を基準にして、それ以降を紀元後とか西暦、それ以前を紀元前と言います。もっとも、現在の研究では、キリストの生誕は、紀元前 4 年とするのが通説のようです。

キリスト教文化の素地には、ヘブライズム、つまりユダヤ文化があります。キリスト教は、脈々たる長いユダヤの歴史の中から、生まれました。このことから、西洋文化の根底に、キリスト教文化とユダヤ文化があるというのは、お分かりかと思えます。

ギリシア人は、インド・ヨーロッパ語族の一派で、第 3 回でもお話したように、紀元前 20 世紀頃から 12 世紀頃にかけて、イオニア人、アイオリス人、ドーリア人の順に北方からバルカン半島に入り、ギリシアの地に住み着きました。東地中海地域には、紀元前 30 世紀頃からは、キクラデス文明、クレタ文明、トロイア文明などの青銅器文明であるエーゲ文明が存在しました。アイオリス人の一派アカイア人は、クレタ文明を継承してミュケーナイ文明を築いた後、クレタ文明を滅ぼしてしまいます。紀元前 12 世紀頃、遅れてバルカン半島を南下して来たドーリア人によって、ミュケーナイ文明も滅ぼされ、エーゲ文明は終焉を迎えます。

数世紀の空白期間を経た後、新たにギリシア人の胎動が始まります。このギリシア人は、鉄器を使用し、都市国家ポリスを形成して独自に

高い文化の華を咲かせましたが、各ポリスが統合して1つにまとまることはありませんでした。ペルシア戦争やポリス間の抗争が続き、ポリスは弱体化していきます。ポリスが衰退するのと時を同じくして、ドーリア人の一派であるマケドニアが台頭してきます。そして、アレクサンドロス大王の出現により、歴史は、新たな局面を迎えることとなります。アレクサンドロス大王による東方遠征は、東西文化の交流と民族の融合をもたらし、その結果、新たに世界市民の概念が生まれます。所謂コスモポリタニズムです。ギリシアの諸都市が、同じ民族であるにも関わらず、決してまとまることなく、数多くのポリスに分かれていたことを考えると、これは画期的な出来事と言えるでしょう。そして、その思想は、ローマに引き継がれます。

始めは、1つの都市国家に過ぎなかったローマですが、次第に力を蓄え、周辺の数々の国々を従えていきます。その圧倒的な軍事力と、征服した町の自由民に市民権を与えるという、類を見ない統治方法によって、ローマは、地中海を東西南北囲む、一大帝国を築き上げます。当然のことながら、古の栄光の地、ギリシアもローマに征服されてしまいます。

もともとイタリア半島には、ギリシアの植民市が多くあり、ローマという都市国家が成立する以前から、イタリアの地域は、ギリシア文化の影響を受けていました。ローマがギリシアを征服した後は、ギリシアの地から、直接、影響を受けることとなります。ローマ人は、哲学、文学、芸術、数学など、あらゆる分野でギリシアの高度な文化に触れ、どんどんそれを吸収していきます。ローマ帝国では、ギリシア語も公用語として使用され、ローマの上流社会では、ギリシア語は教養として欠くべからざるものであり、上流社会に属する人々は、当然、ラテン語とギリシア語を操るバイリンガルでした。

ローマは、ギリシア文化を取り入れるのは上手でしたが、ローマ独自の文化を形成することはありませんでした。ローマ文化は、常にギリ

シア文化の延長線上にありました。このような事実から、紀元前1世紀のローマの詩人ホラティウスは、「征服されたギリシア人は猛きローマを征服した」と言っています。ただ、土木建築に関しては、ギリシアに勝るとも劣らない素晴らしい技術を持っていました。現在まで残っているローマのコロッセウムや、フランスのニームの水道橋など、数多くのローマの遺跡を見れば、お分かりかと思えます。

ローマ建造物で特筆すべきは、随所に見られるアーチ構造です。アーチは、古代エジプト、バビロニア、アッシリアやギリシアなどで古くから使われていましたが、多くは地下の構造物でした。地上の構造物において、アーチを使ったのは、ローマ人が初めてです。ローマ人が、アーチの技術を大きく発展させ、より頑強な建造物の建設を可能にしたと言われています。

少し建築の話が長くなり、焦点がずれましたが、要するに、ローマがギリシア文化の多大な影響を受け、それを踏襲し、征服した先々で広めた結果、ヨーロッパ各地でそれが根付き、基礎となったという訳です。これが、ヘレニズムが3大源流の1つと言われる所以です。

14世紀にイタリアで始まり、西洋各国に広まったルネッサンスもそうでした。再生、復活を意味するフランス語からきたルネッサンス、文芸復興は、ヨーロッパ文化の原点とも言うべきギリシア・ローマの学問、知識、文化への復興を目指す文化的活動でした。キリスト教の支配下にあったおよそ1000年の間に、ヨーロッパでは、古代ギリシア・ローマの文化は影を潜め、古典古代の自由な思考や多様性は失われ、科学はすっかり後退していました。キリスト教一色で塗られた長い中世とは一線を画す、人間中心の、自由な思考の下での文化活動こそが、ルネッサンスなのでした。かくの如く、再び、歴史の表舞台に登場したギリシア文化は、西洋文化を語る上で欠かすことのできない要素の1つとして、現代まで、脈々と受け継がれることとなったのです。